

## 2022（令和4）年度 京都大学 入試問題 理系 第2問 解答例

\*本文は多和田葉子の著名な小説「雲をつかむ話」の初めのあたりの一節である。つまり、虚構である。しかし、この「わたし」による一見とりとめない語りは、京大定番の随想出典のようにも見えたであろう。一般的には、京大も含めて、問題文が随想か小説（とりわけ私小説）かの区別は、リード文や設問などで明記されることが多い。ところが、ここではそれが伏せられている。多くの受験生は随想だろうと思って読み解いたものと考えられる。そこで、あえてこの解答例では、「おそらく随想だろう」と思って解いた場合の解答モデルを記した。

### 問一

手紙は、特定の人に直接送るものであるから、言葉とはいえ、読む相手を深く傷つけてしまう危険のある内容や表現にならないよう、書く結果を負う配慮を要するということ。

\*京大らしい、含蓄のある表現の説明問題であるから、表現力のテストと考えて、傍線部の表現ニュアンスを正確に反映させた解答表現を極力心がけよう。「紙とは言え、～眼球に刺さってしまったら大変。」を、文字通り「紙が目刺さる」と読む人はいないが、ただ「手紙が相手の心を傷つける（ことがないように）」程度では、なぜわざわざ「紙とは言え」と言われているのか、説明不足である。「寸鉄人を刺す」のたとえもあるが、「紙（＝手紙＝言葉）とは言え」とは、言葉の表現・内容に刃物にも匹敵する危険性があることを言うのであり、したがって、「責任を持って書かなければならない」というのも、単に「心構えをもつ」といった程度の解答では説明になっていない。「責任を持つ」とは、「自身の文章表現の結果を負う意思がある」ということである。

### 問二

言葉少なく、実直で武骨な鱒男が、いつもは最低限の保守的な真実ですらいらだちつつ言うのに、急に顔をあげて「出たい」と言った時、その切実な欲望の表現に筆者は驚いたから。

\*前述のとおり、あえて「わたし」とはせず、「筆者」としているが、もちろん本来は「わたし」が正しい。いずれにせよ、主語の無い解答など書いてすまさないように。

\*なぜ「どきとした」のか。いつものことであるなら、驚かない。その逆で、客観的事実でさえ「最低限の守りの真実」しか言わず、それもいらだちつつ言う「鱒男」が、「切実な・出たい」という主観的な「欲望の表現」を突然語ったからである。

### 問三

不確かな未来しかなく存在感の乏しい人が、急に濃密な欲望を本当に述べたいと必死に願う文章から受ける、他人の表現を半ば借り、ある状況を仮定してから話者の希望を述べる語法上の誤りともいえる感触という意味での手触り。

\*まず、「春が来ると」と「春が来たら」とは違うことに着眼した答案になっているだろうか。日本語教育の基礎として、条件を表す「～と・～たら・～ば・～なら」の違いがあるが、その知識はなくとも、本文に「**と**」を使ってある状況を仮定してから話者の希望を述べるのはまちがいだと日本語の教科書には書いてある」とある。つまり、鱒男の「春が来ると、出たいです」は、日本語の誤りなのであり、しかも「文節を他人の庭の木から折ってきて接ぎ木した」ような、借りものらしい不自然なものなのである。しかし、問題は「その誤りや不自然さにもかかわらず」や「誤りや不自然さとは無関係に」などということではなく、逆に、「誤っており不自然であるからこそ」という点にある。おかしな違和感のある文章であっても、ではなく、おかしいからこそ、である。誰でも必死で切羽詰まっていると、きれいな文章など書けないし、話せない。乱れて不自然な文だから、その切実さが如実に伝わるのである。

\*次に、最終段落を踏まえて解答できたであろうか。最終段落が問三で不要ということであれば、わざわざ残さず、カットして出題されるであろう。「春が来ると」と言う人の存在感の薄さと、その性急な「濃い欲望」の表出とに、かえって「本当に言ってみたい」感触がある。

\*問いは「どのような『手触り』か。」であるから、問われたとおりに解答を結ぶこと。